

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 11 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22531037

研究課題名（和文）朝鮮半島の音楽プンムルとサムルノリによる日本型多文化音楽教育の教育内容と教材

研究課題名（英文）Educational Content and Teaching Material of Multicultural Music Education for Japanese Schools Using the Korean Traditional Music of *Pungmul* and *Samulnori*

研究代表者

磯田 三津子 (ISODA MITSUKO)

埼玉大学・教育学部・准教授 10460685

研究成果の概要（和文）：

本研究は、韓国・朝鮮の伝統芸能プンムルとサムルノリを教材化し、それらの教材を用いてどのような教育内容を構成することができるのかについて、米国の多文化音楽教育の理論に基づいて明らかにすることを目的とした。多文化音楽教育の理論においては、音楽の伝統的側面だけではなく、文化変容の実際も踏まえ、真実性を追求しつつ情報を収集し教育内容を構成することの必要性が主張されていた。プンムルとサムルノリは、在日コリアンにとってアイデンティティの形成や多文化共生といった目的に基づいて演奏されている。こうした伝統芸能の新たな意味も含めた教育内容を構成することが必要であることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to examine the educational content of music lessons which use Korean traditional music *Pungmul* and *Samulnori* as teaching materials based on the theory of multicultural music education in the USA.

According to the theory of multicultural music education, authenticity of culture is essential for lessons. In short, it is necessary to gather information about the traditional and modern aspects of the music including acculturation in order to structure the educational content. *Pungmul* and *Samulnori* are related to ethnic identity for Zainich Koreans, and these types of music are performed in order to accomplish a multicultural society. I included ideas for a suggested lesson plan which includes not only music material but also cultural information of *Pungmul* and *Samulnori*.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	200,000	60,000	260,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1300,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教材開発 多文化教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 多文化音楽教育は、米国において 1970 年代より多様な人種・民族との共生に向け、

実践されてきた。日本にも外国にルーツのある多くの人々が暮らしている。こうした日本の社会的背景からも、日本の学校においても多文化音楽教育を実践することは重要な課題である。

(2)1980年代より、在日コリアンの子どもたちへの学校における差別に対してその実践が日本の公立学校において行われるようになった。プンムルとサムルノリは、音楽授業や特別活動、総合的な学習の時間等で、用いられてきた教材である。この教材を通してどのような教育内容を構成することができるのか多文化教育の観点から問い直すことが必要である。

2. 研究の目的

(1)アメリカでの先行事例に学びつつ、日本型の多文化音楽教育の内容を構築し、教師が活用できる教材を試行的に開発する。

(2)プンムルとサムルノリは韓国・朝鮮の器楽アンサンブルであり、在日コリアンにとっても自らのアイデンティティに直結する音楽である。この音楽に日本の子どもたちが接することの教育的・文化的意味を明らかにし、同時に教育的意味が最大になると思われる教育内容を構築し、それを子どもたちに分かり合えることが可能な教材を試行的に開発する。

(3) (1)と(2)を通して多文化教育および音楽教育学の諸概念の再定義を行うとともに、共生型多文化教育の実践がより発展するための理論的基盤を構築する。

3. 研究の方法

3年間の研究は次の三つの方法で取り組んだ。

(1)米国の先行研究の批判的検討、特に「多文化」、「多文化音楽」、「多文化音楽教育」に関する概念の批判的検討を日本との対比において行った。

(2)フィールドワークを通して、プンムルとサムルノリの音楽と文化が演奏者の中でどのように意味づけられているのかを調査した。

(3)プンムルとサムルノリを教材化するための記譜法を検討し、楽譜を作成した。

(4)プンムルとサムルノリの中から、初心者の子どものための学習に適した楽曲の中のリズムパターンを抽出し、チャンゴと呼ばれる

韓国の伝統楽器で演奏できるように教材化した。そして、これらの音楽への理解を深めるための文化的背景に関する教育内容を明らかにした。

4. 研究成果

(1)米国の多文化音楽教育の理論における教材と教育内容

多文化音楽教育としての授業実践において、何を教えることが必要であるのか、その教育内容を明らかにすることは、教材開発を進めるための理論的基盤となる。

本研究では、音楽の文化的側面に焦点を当て、多文化音楽教育の教育内容について、次の二つの視点に基づいて検討した。第一は、米国の多文化音楽教育の概念を整理することである。第二は、多文化音楽教育の教材についてどのように論じられてきたのかを「MENC:全米音楽教育協会」(MENC: The National Association for Music Education)が出版した2000年以降の文献を考察することである。その結果、以下の2点が明らかとなった。

- 米国の多文化音楽教育において、ある民族固有の音楽だけではなく、様々な民族の音楽要素が混ざり合った音楽も教材とされており、民族や国境を越えた音楽の相互影響関係が学習できる内容が取り入れられている。
- 米国の音楽教育者は、多文化音楽教育の学習内容を構成する際に、文化の担い手と直接かかわりながら情報を収集し、真実性を追求することの重要性を主張した。授業を行う際には、文化の担い手にとって、その音楽がどのような意味があるのかについて明らかにし、そのことを学習内容として位置付けることが必要である。

(2)日本における韓国伝統芸能の新たな意味

近年の米国の多文化音楽教育の理論では、ある国や民族の音楽が国境を越えて演奏されることによって、音楽の意味が変容している状況についても、学習内容として位置付けることの必要性が主張されていた。

本研究では、韓国伝統音楽であるプンムル、サムルノリが日本で演奏されることの意味について考察した。そのために、韓国・朝鮮の文化を中心とした祭りである「京都・東九条マダン」の演目「和太鼓&サムルノリ」を対象に検討した。

「和太鼓&サムルノリ」は、和太鼓とサムルノリのフュージョンである。この音楽は、在日コリアンの日本における経験に基づいて作られている。こうしたことから、「和太鼓&サムルノリ」は、在日コリアンがサムル

ノリを用いて日本で創造した新しい音楽であるととらえることができる。

本研究では、「和太鼓&サムルノリ」が多文化音楽教育の教材として、どのような可能性があるのかについて明らかにするために、この演目の演奏者に聞き取りを行い、その内容について検討した。多文化音楽教育としての授業実践において、「和太鼓&サムルノリ」を学習すること意味は、次のようにまとめることができる。

- ・ 在日コリアンの日本における様々な経験について、音楽を通して知ることができる。
- ・ 在日コリアンが日本人と出会ったときの気持ち、在日コリアンと日本人との相容れない状況とそれを乗り越えようとする人々の様子などについて、音楽を通して理解することができる。
- ・ 多文化社会において、人々が異文化と出会ったとき、違いを取り入れながら新たな音楽を創造することや、多様な民族が暮らす社会では異なる民族間の相互関係によって、新たな音楽が作られるという多文化社会の可能性を理解することができる。

(3) 在日コリアンとプンムル、サムルノリ

韓国・朝鮮の文化を中心とした「東九条マダン」は、在日コリアンと地域の日本人が協同してつくる祭りである。この祭りでは、前述した「和太鼓&サムルノリ」の他に、「大プンムル」「大サムルノリ」といった音楽に関する演目がある。これらの芸能は、在日コリアンにとってどのような意味があるのかについて考察した。その結果は以下の2点である。

- ・ プンムルとサムルノリを演奏することは、在日コリアンとしての肯定的な民族意識とアイデンティティ形成に重要な役割があること。
- ・ 祭りの中で、様々な世代の在日コリアン、日本人と一緒に音楽をつくり、演奏することによって、多文化共生の在り方を表現していること。

東九条マダンにおける「和太鼓&サムルノリ」とプンムルとサムルノリの意味は、多文化音楽教育の教育内容として位置付けることができる。

(4) 韓国・朝鮮の伝統音楽による授業実践

在日コリアンによって演奏されているプンムル、サムルノリの意味は、前述した通りである。多文化音楽教育の理論に従えば、韓国・朝鮮におけるプンムル、サムルノリの意味だけではなく、日本において、なぜ、これらの音楽が演奏されているのかについても、教育内容を構成することが必要である。

それでは、実際、これらの音楽は、どのように学校で学習されているのだろうか。そのことを明らかにするために韓国・朝鮮の文化に関する実践を行ってきた京都市の3名の小学校教員に対して聞き取り調査を行った。この3名の教員は東九条マダンに参加している。調査の結果は以下の2点である。

- ・ 小学校3年生の国語教材である韓国の民話「三年峠」に基づいて、で伝統楽器を用いた劇を学芸会で発表する。
- ・ クラブ活動でチャンゴという韓国伝統楽器を使って簡単なリズムを演奏する。

以上に加え、京都市の小学校教師にとって、東九条マダンとは、韓国・朝鮮を教えるための教材を収集する場所としても機能していることが明らかとなった。

(5) プンムルとサムルノリの教材開発の視点

以上の(1)から(4)の内容をまとめ、プンムルとサムルノリを用いた日本型の多文化音楽教育の教材開発を行った。

これまで、プンムルとサムルノリといった韓国の伝統音楽は、在日コリアンの子どもたちについて問題意識を抱いてきた教師によって、教材化されてきた。

ところが、そこには課題もある。たとえば、韓国・朝鮮の文化や歴史を学ぶのか、それとも在日コリアンの暮らしや歴史を学ぶのかということである。グラントとスリーター(Sleeter & Grant, 2010)は、個々のグループを動態として捉えた情報を子どもたちに伝えることが重要であることを指摘している。言い換えると、伝統芸能を静態として捉えることによって、韓国・朝鮮の典型的な側面しか学ぶことができず、それによってその民族に対する固定したイメージを抱いてしまうという問題が生ずることへの危惧である。このことを踏まえれば、現在の伝統芸能の新しい意味、特に、在日コリアンにとっての伝統芸能とは何かについて探究し、その情報を子どもたちに伝えることが多文化教育としては必要である。

以上の課題意識に基づいて、プンムル、サムルノリを教材化した。「音楽」と「文化的背景」を総合的に学習することが必要であると考え、以下の通り教材化を行った。

① 音楽（演奏に関する活動）

- ・ プンムルとサムルノリの長短(チャンダン)と呼ばれるリズムの中で、初心者でも短時間で習得できるものを、韓国・朝鮮の打楽器チャンゴで演奏する。
- ・ 本研究においては、サムルノリの中の「クッコリ」「ヒモリ」という楽曲の一部を教材とした。これらの教材の一部を抽出して教材化したものは、初心者の子どもたちも短時間で習得する

ことができる。

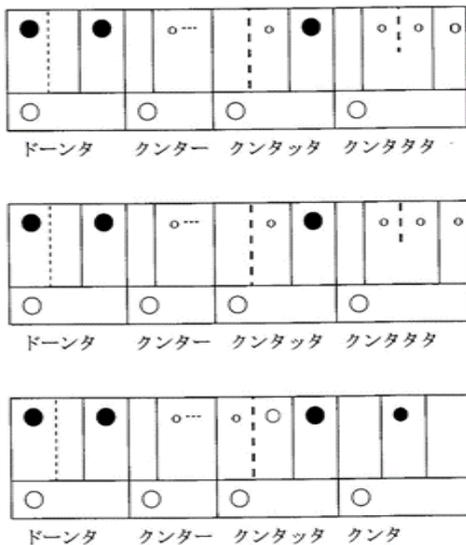
- ・ プンムル、サムルノリの長短は、基本的には口唱歌で覚えて演奏する。一方で、口唱歌の補助的な役割として楽譜を用いることもある。本研究では、サムルノリの「クッコリ」という楽曲の中から、基本的な長短を取り出し、次の3種類の楽譜に記した。(a)五線譜、(b)韓国・朝鮮の伝統音楽のための楽譜、(c)日本で開発された指導用の楽譜。(c)は、神奈川県川崎市にある社会福祉法人青丘社ふれあい館の2012年度ふれあい館社会教育研究集会「みんなでつくろう！ふれあいフェスタ」(2013年3月10日〈日〉)に向けて行われたチャンゴの5回講座で配布された田貞桃(チョン・チョンド)氏が作成した記譜方法に基づいている。以下は、「クッコリ」の長短の一部を3種類の楽譜に記したものである。

クッコリ

(a) 五線譜



(b) 韓国・朝鮮の伝統音楽のための楽譜



* (a)(b)は、次の文献に基づいて作成した。
Korean Conservatorium of Performing Arts Sumulnori Academy of Music, Kim

Duku Soo, Lee Kwang Soo and Kang Min Seok (2004). *Samulnori: Korean Traditional Percussion Rhythm Workbook 2 Samdo Sul Changgo Karak*, Samho Music.

(c) 日本で開発された指導用の楽譜

1	①	ドーン
	2	
	3	タ
2	②	クン
	2	ター
	3	
3	③	クン
	2	タ
	3	タ
4	④	クン
	2	タ
	3	タ
1	①	ドーン
	2	
	3	タ
2	②	クン
	2	ター
	3	
3	③	クン
	2	タ
	3	タ
4	④	クン
	2	タ
	3	
1	①	ドーン
	2	
	3	タ
2	②	クン
	2	ター
	3	
3	③	クン
	2	タ
	3	タ
4	④	クン
	2	タ
	3	

クン：クングルチェと呼ばれる撥で太鼓の片側を叩く。

タ：ヨルチェと呼ばれる撥で鼓面の片側を叩く。

ドン：クングルチェとヨルチェで同時に双方の湖面を叩く。

② 文化的背景に関する内容

文化的背景に関する学習内容については、以下の通り要約することができる。

- ・ 韓国・朝鮮において、プンムルは、農村で人々が収穫に感謝し、豊作を祈る際に演奏されてきた。
- ・ 金徳洙(キム・ドクス)は、1978年に李光壽(イ・グァンス)、崔鐘實(チェ・ジョンシル)、姜旻奭(カン・ミョンソク)と共に韓国の伝統楽器によるパーカッションアンサンブルグループ「サムルノリ」を結成した。金は、民族芸能であるプンムルを舞台芸術に発展させ、韓国以外の国々でも演奏会を開くのと同時に、伝統音楽の記録に取り

組んだ。このグループ名が、音楽のジャンルのように用いられるようになった。

- ・ 日本においても、プンムル、サムルノリといった音楽は演奏されている。これらの音楽は、在日コリアンにとって、自分のルーツを明らかにできることであり、在日コリアンであることへの承認を得ることのできる行為として演奏されているのである。さらに、プンムルやサムルノリの独特の長短や音楽の雰囲気に触れることは、在日コリアンが自分自身のルーツに近づく手段となっている。
- ・ プンムル、サムルノリといった音楽は、集団で演奏される。こうした音楽を様々な人々と一緒に練習し、表現することは、韓国の伝統芸能を通して、祭りのなかで多様な人々と協力し、一つのものを作り上げていくイメージを表現しアピールするための意味もある。

以上のように、プンムルとサムルノリの簡単な長短を演奏すること、そして、これらの音楽がなぜ、演奏されているのかといった観点から音楽の文化的コンテクストについての情報を子どもたちに知らせることができる。

(6) 今後の課題

本研究は、韓国伝統音楽プンムルとサムルノリを教材化し、学習内容を明らかにした。本研究においては、ここで開発した教材を用いた授業を行い、検証することはできなかった。それに加え、本研究では、ここで開発した教材をどのような学習方法も用いて授業実践を行えばよいのかについては検討しなかった。

今後の課題としては、ここで開発したプンムル、サムルノリの教材を用いた授業が子どもたちにどのような意味があるのか、そしてその際にはどのような学習方法を用いたらよいのかについてについて調査することである。また、韓国・朝鮮の音楽だけではなく、中国、フィリピン、ブラジルといった日本で暮らす外国にルーツのある人々の音楽の教材開発をしていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 磯田三津子、京都・東九条マダンにおける韓国伝統音楽-在日コリアンの祭りが

創造する伝統芸能の新たな意味、民俗音楽研究、査読有、第37巻、2013 (掲載確定)

- ② 磯田三津子、米国の多文化音楽教育にみる文化と授業実践-近年の学習内容の変化をめぐって、音楽学習研究、査読有、第7巻、2011、11-20
- ③ 磯田三津子、文化を超えて学びあう～京都・東九条マダンから広がる小学校の実践、音楽文化の創造、査読なし、vol. 61、2011、32-35
- ④ 磯田三津子、多文化教育としての音楽授業-京都東九条マダンの演目「和太鼓&サムルノリ」の教材化に向けて、音楽学習研究、査読有、第6巻、2010、11-18

[学会発表] (計3件)

- ① 磯田三津子、多文化教育の教材としての韓国伝統芸能「プンムル」の可能性、日本国際理解教育学会、第23回大会、広島経済大学、2013年7月6日
- ② 磯田三津子、京都東九条マダンの韓国伝統音楽-在日コリアンの祭りが創造する伝統芸能の新たな意味、日本民俗学会、第64回大会、東京学芸大学、2012年10月7日
- ③ Mitsuko Isoda, Zainichi Koreans and Korean Music in Kyoto's Higashi-Kujyo Madang Festival, Third International Symposium of the ICTM, The Chinese University of Hong Kong, 2nd Augst, 2012.

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

磯田 三津子 (ISODA MITSUKO)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：10460685

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：